

この本との出会いは唐突というか、偶然でした。数年前、地歴公民科の教科の関係で私の所に届いた一冊の本。暫くは中も見ないまま本棚に置いていました。その存在も忘れていたある日、何気なく手にした「十七条憲法」。単に十七条憲法の解説書と思ってページをめくっていると、次の言葉が目飛び込んできたのです。

**「晴れてよし 曇りてもよし 富士の山 もとの姿は変らざりけり」(山岡鉄舟)**

なぜ「憲法十七条」に山岡鉄舟？ 頭の中に「？」がいくつも広がり、この本を読むに至りました。この本は単に「憲法十七条」の解説書ではなく、それぞれの条文の背景にある人間の実相を凝視した深い呻吟が籠められており、憂国の至情と同時にこの世に生きる人々への叱咤激励を読み説いているものだったのです。

その内容を少しだけ紹介すると…

第一条 「和を以て貴しと為し、忤う無きを宗と為よ。…(以下略)」

誰でも勉強した第一条の「和」に着目し、「和」とは“誠のこころの通い合い”であるとし、その意味を『論語』から引用し、「和して同ぜず」(道理に従って仲睦まじくするが、道理に合わないことに対してははっきりと意見を言い、むやみに賛同することはない)と解説しています。

第二条 「篤く三宝を敬え。三宝とは仏・法・僧なり。…(以下略)」

これも有名な句であると思います。しかし本書では、「三宝」とは①「師」②「志」③「友」と導いています。「師」とは「敬すべき人生の師、あるいは良書を得ること」であり、「志」では「人生の志を立てること」が何より大切であり、「友」を「人生の友を得ること、共に修行の苦しみを乗り越えようとする勝友を得ること」と解説し、さらに「人生のあり様」を考えると、「宿命」「運命」「立命」「知命」と展開していくのです。

もうここまでくると本書を読むのにためらいは全くなく、自分自身の生きる「指針」として、完全に「バイブル」となっています。この際、憲法十七条の条文はどうでもいいのです。大切なのはその内容。本書は「解説書」ではなく、「人生いかにあるべきか」という人生哲学の書なのです。もちろん選手にも本書の内容を分かりやすく解説しながら伝えています。

本書は原稿から編集・校正・表紙案・発行まですべて著者の自作であり、残念ながら書店にならぶことはありませんが、口コミだけで2500部以上の求めがあり、一部で大きな反響を呼んでいる事実があるそうです(インターネットでの購入は可能です)。

いかに生き、そしていかに人を生かしていくか。情報過多の現代、年々感性の乏しい独りよがりな「自分さえ良ければ」という若者が増えてきていると感じているのは私だけではないはずです。本書にある「日本人の心」をまずは私たち指導者がもう一度見直し、「志」ある青年を育成していくことが我々の使命であると信じて疑いません。